博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）佐藤公彦

本論文は、1920年代に成立した中国のフェミニズム思想がその後どのような歴史的軌跡を辿ったのか、その展開と挫折の紆余曲折にみちた過程を歴史の中に位置付けよう、そして五・四時期と現代（当代）中国のフェミニズムとの間にある「落差」を歴史的に説明しよう、としたものである。その論文構成は次のようになっている。

序章

第一章　近代中国の婦人解放論――『新青年』と『婦女雑誌』の「自由恋愛論」の分析

第二章　丁玲の生涯

第三章　近代中国における「女性主義」の成立とその展開――丁玲の初期作品を中心に

第四章　中国の「社会主義革命」「民族解放闘争」過程における「女性主義」のジレンマ――延安期の丁玲作品を中心に

第五章　中国現代政治形態の原型――「整風運動」

結論　中国フェミニズムの現状

論文の課題意識は鮮明で、論旨は明確である。大いなる意欲と努力でこの歴史過程をフェミニズム論で一気に説明し抜いた熱っぽい論文であるといってよい。

第一章では、五・四期の恋愛論をめぐる論争・言説が取上げられる。その恋愛論は「女性解放論」であっただけでなく、青年たちに恋愛の自由を求めて、伝統的家族制度を批判し、親の決めた結婚を拒否し家出をするように、駆り立てた。それは、「個」「女性」の解放の一面を持っていたが、それはまた一面で、夫への女性の隷属という側面を持つことが指摘される。駆られるようにして家出をした女性たちは、1920年代に、自らがおかれた厳しい現実を直視し、フェミニズム思想を誕生させる。その代表的女性が小説家・丁玲である。筆者は、論文の目的である五・四期以後に生まれた中国フェミニズムが現在のような状況に至ったその「落差」を解明するのに、この小説家を考察対象としてその作品とそこに込められた思想を辿ることが最も良いと選び取った。

丁玲の作品はその性格によって、初期、中期、後期に分けることができるが、まず、第二章で、彼女のライフヒストリーが、この後の第三章以下で分析される思想的軌跡を簡便に先取りしつつ述べられる。

第三章で、1920年代後半から30年にかけて書かれたフェミニズムにあふれる初期の丁玲諸作品(『夢珂』『莎菲女士的日記』等)を、「近代家父長制」「女性の商品化」「娼婦差別」「性の二重基準」といったフェミニズム概念で読み直してみると、彼女が、当時中国に生まれつつあった「近代社会」が内包していた女性差別を問題化したことが明らかになる、という。その後、1930年に書かれた作品（「韋護」など）から彼女の作品は変化しはじめる。従来の研究は、この変化を「女性主義」から「革命」への転換、と見ているが、筆者は、この時期の中国の国家・民族の危機（国民革命の挫折、山東出兵、満州事変））に直面した彼女が、「女

性の国民化」を受け入れることによって、以前から持っていた女性主義を放棄することなく、「生き残り戦略」としてとった選択であった、と解釈する。したがって、彼女の女性主義は彼女の内部で生き続けたということになる。彼女は左聯での活動をつづけるが、夫胡也瀬を殺され、自身も国民党に捕らえられて、南京での監禁生活をおくった。しかしその後抜け出て延安に入り、「革命文学」を書くようになった。この時期の作品は、従来から、社会主義革命を追求し、それを阻害する中国社会の遅れた封建的残存物を問題化したものであり、一時的な女性主義の復活は見られるが、完全な形ではなかったと理解されてきた。それを超えて、江上幸子氏は、抗日戦争中の女性が戦時強姦と中国社会の社会通念によって二重に被害を被っていたことを問題化したものである、と指摘し、白露は、「農村の伝統的家族制度と自我をもてない女性」というフェミニズム的把握がある、と主張しているが、そのどちらも、「国家・民族とフェミニズムの錯綜した関係」をまだ十分説明し得ていない、と批判する。筆者は、戦争と経済的危機のなかでフェミニストの要求が後回しにされる中、延安社会を批判する作品を丁玲は書いたのだ、というジョンソンの見解を発展させ、「生き残り戦略」をとって「女性の国民化」を受け入れた丁玲は、延安に入って忠誠心を発揮して「チェアリーダー」的役割を果たしつつ革命と抗日の高揚のための作品を書いたが、女性主義の視線を失うことなく、その現実のなかで阻害され従属させられる女性の具体的姿を見て、それを問題化し作品に書いた（「霞村にいた頃」「夜」）。そして「三八節有感」を書いて、文化的保守主義と政治的革新主義を特徴とするナショナリスト集団＝延安社会のセックス・ジェンダー体制への批判を行った、と捉えるべきだと主張する。だから、彼女の作品は、民族・階級集団である延安・共産党のなかでジェンダーを問題化することは利敵行為に通ずるとして、批判されることになったのだ、と論じる。

第五章は、この批判運動、反右派闘争から文化大革命に至る現代中国政治の原型をなす1942年の延安「整風運動」のなかで批判にさらされた中国フェミニズムを追う。丁玲の「三八節有感」は、やはり延安社会の問題性を批判した王実味の「野百合花」「政治家・芸術家」とともにこの整風運動の標的にされ批判にさらされた。王実味は批判を拒否したが、丁玲は批判を受け入れ、再教育を受け、その後は「中性的な」「革命文学」（「太陽照在桑乾河上」）を書くことになる。そして再び自分自身（女性）を問題化することはなくなった。1920年代に成立した中国フェミニズムは挫折した。

この基本型は1957年の反右派闘争でも変わらず、丁玲は右派として批判され、黒龍江北大荒へ自ら行くことになった。1979年に北京に戻っても、彼女は「二度と自分の信念を取り戻すことはなかった」。

結論では、1949年以後の人民共和国政治体制のもとでは、共産党「指導」下のマルクス主義的女性解放論をとる婦女連が中心に存在していたが、フェミニズムの生命は、国家権力から自由に自らの問題を自らが語り、自らの解決の道を探すことができるのか、ということにかかっている。この国家権力とフェミニズムとの対立・せめぎあいを最も良く示したのが、鄭州大学の李小江らの自立的フェミニストグループと国家権力との1995年の北京

世界女性会議をめぐる葛藤であったとして、その対立の構造を分析する。そして、この国家権力とフェミニズムとのあいだの「落差」を理解するには、本論文が追求してきた1920年代からの中国フェミニズム思想の歴史的経験の理解がキイポイントである、と結論づける。

本論文に対する評価

筆者は、韓国出身の留学生でありながら、中国現代の歴史資料・文献と文学作品を的確に読解し、日本語で長大な博士論文を執筆して、1920 年代の中国フェミニズムの誕生から1990年代までを一貫させて説明し得ている。これは非常に高く評価してよい。しかし、この歴史過程を丁玲を中心にフェミニズム論で一気に説明しぬいたが故に、その議論が明確になったと同時に、またいくつかの問題を残すことになった。審査委員から質問が相継いだのは、従来からの、丁玲は1930年代に「小ブルジョワ個人主義」から「革命」へと転換したとの捉え方に対して、筆者が「女性の＜国民化＞」という捉え方を提示していることであった。つまり、丁玲は女性主義を消失させたのではなく、「国家・民族の危機に直面して『女性の国民化』を積極的に受け入れることによる女性解放の模索、つまり『生き残り戦略』として理解することができるのではないか」というのが、筆者の論の核心であるが、この論は、中国での評価基準＝革命への全的投入度合い基準分類方式――――丁玲の小ブルジョワ性の清算の不充分さ、共産党への全的自己投入の不十分さ――――に傾きがちな従来の研究の把握にたいして、丁玲がなぜ共産党の「革命」に共鳴しつつも、それと距離感を持ち続け、女性の抱えた問題を作品化しえたのかということを説明しうる有効性を持つものだが、「女性の国民化」というのは、上野千鶴子氏が日本の戦時体制下での女性の動員について提示した概念で、それを緩用することによるメリットもあるが、それぞれ各国の個別具体性を無視することもできないのだから、もう少し慎重に現実に即して吟味してみる必要があるのではないか、という指摘がなされた。

また、1980年代の中国フェミニズムとの関連で、丁玲における女性主義の挫折とその後、を問題とする時、晩年の丁玲の作品・思想を対象にして考察を進める必要があったのではないか、そうすると、もっと立体的に考えられるようになったのではないか、という指摘もなされた。第一章の恋愛論分析とその後の丁玲の作品・思想分析との間にいささか断絶が見られ、「莎菲女士の日記」の恋愛論との繋がりを軸にすれば、その連続性がもっと出たのではないか、という意見も出された。

その他、いくつか事実に関する問題や作品解釈についての疑問・異見も出されたが、それらは、本論文が刺激に満ちた意欲的な論旨を展開しているが故のものであった。審査委員会は、本論文は論旨明確で、従来の個別的解釈枠を超えた全体を一貫して説明することに成功しており、新たな解釈域に達した説得力を持つ展開となっている。作品分析も的確で、質疑においても的確な応答で応え、研究者としての資質を十分に示した。全員一致で博士の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論を出した。